



わだ けいこ 和田 恵子 さん（榎生一丁目）

子どもの頃に荒川さん宅に伺った時の記憶が思い起こされ、懐かしい気持ちになりました。

国登録有形文化財に指定されている「荒川家住宅」。建築から百年近く歳月を経た現在も、住まいとして現役です。今秋の一般公開に先立ち、本住宅の魅力について当主の荒川洋一さんに伺いました。

## 昭和初期の魅力が残る外観

荒川家住宅の主屋は昭和8年に建てられました。モルタル塗アールデコ調の洋館に和風の方形屋根を乗せた外観で、「帝冠様式」を思わせる特異な意匠が施されています。醤油醸造業を営んでいた荒川さんの祖父が東京で見聞した美意識が、この建物の至る所に現れています。



# 百年の記憶が宿る商家の佇まい 国登録有形文化財 荒川家住宅を訪ねて



荒川さんご夫妻

外壁はササラ（竹製の刷毛）でモルタルに凹凸をつけるドイツ壁。荒川さんは「青みを帯びた独特の色合いは、顔料の影響が経年変化によるものか、あるいは石材の発色かと、訪れる人の話題になります」と時を経てもなお、色あせない魅力を語ります。

## 設計から見る先人の知恵

建物の中を案内してもらうと、随所に光る設計の工夫に目を奪われました。なかでも興味深いのが、徹底した通風設計です。「欄間や建具はすべて取り外して全開放できる構造で、押し入れ上部の網戸や外扉まで連動させ、建物全体に風の通り道を

確保する仕組みが施されています。真夏でも蚊帳を吊しながら開け放った室内で快適に過ごせます」とエアカンの無い時代の生活の知恵を教えてくださいました。取材日は気温が高く暑い日でしたが、室内はとても涼しく、設計技術の高さを実感しました。

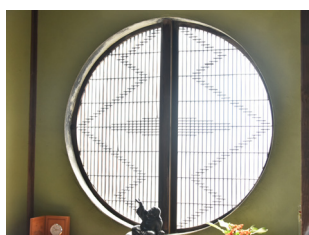
また、敷地内最古の建築物の内蔵は火災時に扉を密閉できるよう、精密に設計されており、荒川家では目張り味噌を使い、火事の際には焼成で硬化した味噌が空気を遮断するという言い伝えが残っているそうです。

## 随所に宿る商家の美意識

奥座敷は大正期の建築で、天井を高くとり、まわり廊下をめぐらせた贅沢な構えとなっています。取材中、荒川さんが特に強調されたのは「人の目につかない場所にこそ良い素材を使う」という当時の商家の美意識でした。例えば、トイレには継ぎ目の無い大きな一枚板が床に敷かれ、天井は唐傘天井や網代など意匠を凝



奥座敷と内蔵（写真奥側）



窓に施された荒川家の家紋



荒川家住宅（田町）  
主屋（左）・店蔵（右）



詳しくはこちら

22-0183

【問】文化スポーツ課（本庁3階）

※入場無料。希望者は3階での茶会に参加可（参加費500円）。

▼日時 10月31日（土）、11月1日（日）午前10時～午後4時

※入場無料。希望者は3階での茶会に参加可（参加費500円）。

【問】文化スポーツ課（本庁3階）

## 荒川家住宅（一部）一般公開

随所に光る生活の知恵と商家の美意識は、どこをとっても興味深く、感嘆しました。荒川家住宅の一般公開は約10年ぶりとなります。この機会にぜひ足を運んでください。

## 取材を終えて

らした仕上げが施されています。「使う人が知らず知らずのうちに上質さを感じるように」そうした矜持が、荒川家住宅の随所に宿っています。